幼児の人形劇鑑賞におけるユーモア理解

糸井　嘉
（大学院発達教育学研究科児童学専攻）

棚橋美代子
（児童学科教授）

はじめに

３歳という年齢は，人形劇の鑑賞におけるひとつの節目である。有料人形劇の多くは３歳から入場料が必要となる[1]。「０，１，２歳を観劇対象とする人形劇」は近年増加傾向にあるが，やはり「３歳未満」という区切りが見られる[2]。また人形劇鑑賞の観客調査においては，３歳を節目として鑑賞時の反応が大きく変わることが報告されている[3]。０～２歳と比べ，３歳を境に「笑い」の反応が急激に増えるのである。

以上のことから，人形劇鑑賞において，３歳を節目とする幼児の発達特徴は重要な意味を持つと考える。

３歳は話し言葉の基礎を獲得するという点で非常に特徴的である[4]。台詞が分かれば人形劇の内容理解の度合いも高くなる。しかし言葉は笑いにとってひとつの材料であり，笑いを生じさせる根本的な要因であるとはいえない。

本稿では，笑いに焦点をあて，幼児の人形劇鑑賞にかかわる発達特徴について述べる。また，具体例として人形劇「なかよし」を取り上げ，幼児の鑑賞時の笑いを引き出す要因について考察する。

１　人形劇「なかよし」

人形劇「なかよし」（以下「なかよし」と表記）にはいくつかの観客調査による先行研究があり，笑い反応が多く観察されているため，笑いに着目する上で適した作品であると考える。

「なかよし」は片手遣いの人形劇である。両手にそれぞれ指遣い人形を持ち，一人二役で演じる。片手遣いによる基本的な動作の組み合わせで構成され，さらに，２つの人形が関連しあって動くという「人形劇の構造力学」といえるような要素が含まれている[5]。内容は，二人の子どもが遊ぶ５つの場面（挨拶，かくれんぼ，相撲，綱引き，汽車ごっこ）から成り立っており，「日常的な子どもの遊びをスケッチした」[6]作品となっている。ルーツがはっきりしないにもかかわらず，70年近くもの間多くのプロ・アマチュア劇団が演じ伝わってきており，日本の人形劇の代表的レパートリーであるといえる。

２　先行研究・観客調査と笑い

先行研究における人形劇の観客調査では，観客の笑い反応による分析が大きなウエイトを占めている[7]。松崎が「３，４，５歳は，ストーリーの理解やテーマ性とのかかわりを理解した鑑賞が可能になり，その鑑賞は『笑い』によって把握することができる」[8]と述べている通り，笑いという反応は内容理解の上に生じるものだという認識のもと，分析の中で重視されてきたのだと考えられる。ある作品を鑑賞する間，何歳の子どもにどのタイミングでどれくらいの大きさの笑いが生じたのか，というような項目について，詳細な観察と分析が報告されている。しかし，笑いが何に起因しており，どのような構造をもって笑いという反応として表れたのかについては，未だ一貫した考察はなされていない。

向平らは笑いを生じさせた要因として，繰り返し，登場人物の気持ちの理解，登場人物同士の対立関係を挙げている[9]。松崎は笑いの説明として，登場人物の内面の想像・理解，先の展

開の予期，動きのリズムの変化・意外性を挙げている[10]。

これらをより一般的な理論で説明するにはどうしたら良いだろうか。

3　笑いの理論

モリオールによると，伝統的な笑いの理論は次の３つ，優越の理論，ズレの理論，放出の理論である[11]。

優越の理論は最も古い。笑いとは他人に対する優越の表現であり，肯定的な自己評価が含まれるという考え方である。

ズレの理論は，「ある概念と現実の対象とのズレに関する突然の知覚」が笑いを生み出すというものである。ズレとは，例えば「予期したことと実際に見ることの間に生じる不釣り合い」を示す。

放出の理論では，笑いとは鬱積したエネルギーの発散である。禁止などの抑圧や緊張が，突然解除された時に笑いが生じるという考え方である。

モリオールはこの３つの伝統的な理論について，いずれも笑いについての包括的な理論とはいえないと考え，それぞれが笑いのどのような側面を説明しており，また共通する一般的特徴とは何かを，次のように述べている。（表１：表はモリオールの記述を元に糸井が作成）

モリオールの考えによると，優越の理論は感情的側面から，ズレの理論は認知的・思考的側面から，放出の理論は身体的側面から笑いを説明している。そして３つの理論から抽出できる笑いの一般的特徴は，

１）心理状態が変化すること
２）変化が突然であること
３）愉快であること

以上の３点であり，ここから導き出される包括的な笑いの理論とは，「笑いは愉快な心理的転位から生じる」というものである。

モリオールが述べたように，伝統的な理論はそれぞれ笑いのある側面のみを示しており，包括的な理論ではないように思われる。１つの笑いについて，ある側面から見た時と別の側面から見た時では異なる解釈が生まれるだろう。

本稿では，モリオールによる笑いの理論を用い，特にユーモアの笑いについて考えたい[12]。

先の３つの理論の中では，ユーモアの笑いに有効なのはズレの理論である。ユーモアの笑いにおいては，ズレの認識が心理的転位をもたらす。ただし「愉快な」という条件にある通り，ズレへの認識が愉快さよりも大きな力を持った他の感情，例えば，恐れ，憐れみ，道徳的反感，憤慨，嫌悪感などを伴う場合には，笑いは生じない。

4　幼児のユーモア理解

幼児とユーモアについて，モリオールは次のように述べている[13]。ユーモアにおける心理的転位とは，概念の転位である。子どもは３，４歳頃，言葉の獲得によって概念を習得する。習得された概念は未来の経験を予期するための基礎としてはたらき，子どもは予期と現実のズレを楽しめるようになる。これがユーモアの理解である。また，子どもはしばしば，今までに似たようなことを経験していないというだけで，

表１　伝統的な笑いの理論の相違と一般的特徴，およびモリオールの理論

	優越の理論	ズレの理論	放出の理論
視　点	感情的側面	認知的・思考的側面	身体的側面
焦　点	情　動	対象・観念	生物学的機能
一般的特徴	１心理状態の変化 ・変化の認知により生じる（ズレ） ・肯定的感情の高揚や否定的感情の停止，抑圧された感情の発散（優越・放出） ２突然の変化 ３愉快である　…不快な心理的転位では笑えない		
モリオール	⇒笑いは愉快な心理的転位から生じる		

それをユーモラスだと感じる。これは「予期と現実が一致しなかったという認識への転位」ではなく，「全く予期できないものに驚いた状態への転位」である。この心理的転位が子どもにとって愉快なものであれば，つまり恐ろしいものでなければ，子どもは笑うのである。

幼児期に理解されるユーモアには，子どもが習得した概念に基づくズレの認識によるものと，より単純な驚きのズレによるものがあるということである。前者は，確かな「通常の状態の把握」と「ズレの認識」の両方がなければユーモアとして成立しない。また後者は，子どもが成長し多くを知るにつれ生じにくくなる。

先行研究で挙げられた笑いの要因について振り返ってみると，登場人物の内面の理解や展開の予期そのものが笑いを生じさせたのではなく，内面の理解や展開の予期がきっかけとなって何らかのズレの認識が起こったために，笑いという反応が表れたのだと考えられる。

5　日本のユーモアと「なかよし」

大島によると，日本のユーモアの特徴とは，会話形式，ワード・バウンシング（はずむようにポンポンとリズムよく言葉のやりとりをすること），体験談，内輪うけにあり，人間関係が重要であるのだという。日本におけるユーモアの中心は，自分，家族，友人など周りの人たちとのつながりが見える個人的な会話や体験談である。笑いが生じる場面では前提として，個人的な話を笑い合える人間関係がすでにできており，笑いに関わるメンバーの情報や知識は共有されている。そしてユーモアの示され方は，聞き手の参加を前提とする，間を生かした会話形式が基本となっているのである。

欧米では，初対面でのジョークはアイスブレーカー（緊張をほぐすもの）の役割を果たしており，人間関係を作る手段として笑いが用いられている。それは一般的に使いまわせる形をしており，多くは合いの手を必要としない一人語りで完結する。日本のユーモアとは逆の性質を持っているのである[14)]。

このような日本のユーモアの特徴を踏まえ，人形劇「なかよし」を見ると，次のようなことが言える。

1）２人の会話形式で進行する
2）内容は２人の体験談であり，幼児自身や友人とのつながりが見える
3）挨拶のシーンにより登場人物と観客の関係が作られる。また２人の様子が安心できる人間関係を示している
4）登場人物に関する情報は単純であり，すぐに共有される

以上の点から，「なかよし」は日本の子どもにとって日常生活での笑い・ユーモアに近い性質を持つ人形劇であると考えられる。

モリオールの幼児に関する記述を見ると，幼児のユーモアの笑いには大きな個人差があると予想できるが，一般的には，「なかよし」におけるどのようなズレの認識がユーモアとして理解されていると考えられるだろうか。この問いに答えるため，単純な驚きのユーモアについては除外して考察することとする。

6　心の理論

日本のユーモアと「なかよし」に共通する特徴として，会話形式と人間関係が挙げられることから，登場人物の心理面への理解と，そこから得られるズレの認識がユーモアとしてはたらいていると推測される。

幼児は登場人物の気持ちをどのように察しているのだろうか。

「人間の心がどのように働いて行動に影響するのかを理解するための基本的枠組み」は，「心の理論」と呼ばれる。これにより子どもは他者の心の動きを察することができるようになる。心の理論は５，６歳頃までに成立し，児童期を通してさらに発達していく[15)]。

ウェルマンによると，就学前の子どもの心の理論の中核をなすものは，行為，欲求，信念の概念である[16)]。

まず，「ある人がある行為をするのは，それに結びついた欲求を持っているからである」という理解は，３歳までに形成される。〈欲求→行為〉の図式による，「～したいから，～した」

という理解である。

次に，行為には，その人が知っていることや思っていること（信念）もかかわっていることを理解する。〈信念→行為〉の図式による，「～だと思って（知って）いるから，～した」という理解である。3歳を過ぎた多くの子どもは，ある人の行為に関して，「～だと思っていたから」という説明ができるという。

しかし，「人は，（それが間違ったものであっても）自分の信念に対応した行為をする」という理解は，4歳を超えないと困難である[17]。〈欲求・信念→行為〉の図式による，「～したいから，そして，～だと思っているから，～した」，あるいは，「～したい，しかし，～と思っているから，～した」という理解である。これにより，欲求と信念の両方を考慮し，人の行為の正確な予測ができるようになる。

以上のことは，次のように整理できる。幼児は登場人物の行為（言動）から，その人物の欲求・信念（気持ち）を察し，それを元に次の行為の予測を立てている。これを可能にする基本的な心の理論は，3歳から5歳の間に段階を経て獲得される。

7　具体例および考察

「なかよし」におけるユーモア，すなわち笑いを生じさせるズレについて詳細に見るため，上演中よく笑いが生じるシーンから2カ所を抜粋し，表2，表3のように分析した[18]。

心の理論を参考に，2人の登場人物（ミーちゃん，タマちゃん）の言動（台詞，動き）の背景となる心の動きを，欲求と信念に分け記述した。欲求は「～したい」，信念は「～と思っている」という形で表すよう統一したため，文章としては不自然な箇所もある。

表2の【挨拶】は，2人が同時に頭を下げて挨拶をした後，頭を上げるタイミングが合わず，頭を下げたままの相手を見て慌てて頭を下げ直すことを交互に繰り返すシーンである。

表2に表した通り，ある瞬間での2人の欲求・信念にはズレがある。1人が頭を上げた時点では，まだ笑いは生じない。ズレが認識されていないためである。頭を上げた方が，まだ頭を下げたままであるもう1人を見て慌てることによって，2人の気持ちがズレていたことが認識され，ユーモアとなるのである。さらに，これが繰り返されることで2人の間のズレが強調されるとともに，観客は次の展開を予期することができ，予期と劇中の展開の間にもズレが生じるため，おかしみが増すのである。

笑いは，予期からの逸脱というズレがある場合だけでなく，「まさに予期した通りになった」という場合にも生じる。丹下は「なかよし」の繰り返しシーンについて，「繰り返すことで子

表2　挨拶の1シーン「なかよし」

人　物	欲求　～したい	信念　～と思っている	行為・台詞
2人そろって頭を下げる（観客に向かって挨拶をしている）			
ミーちゃん	挨拶を終わりたい	十分挨拶できた	頭をあげる
タマちゃん	挨拶をしていたい	丁寧にしよう	頭は下げたまま
ミーちゃんはタマちゃんを見て，慌てて頭を下げ直す			
ミーちゃん	タマちゃんと挨拶のタイミングを合わせたい	タマちゃんはまだ頭を下げている	頭は下げたまま
タマちゃん	挨拶を終わりたい	十分挨拶できた	頭をあげる
タマちゃんはミーちゃんを見て，慌てて頭を下げ直す			
ミーちゃん	挨拶を終わりたい	もうタマちゃんも頭を上げているだろう	頭をあげ，タマちゃんを確認する
タマちゃん	ミーちゃんと挨拶のタイミングを合わせたい	ミーちゃんはまだ頭を下げている	頭は下げたまま
ミーちゃんは素早く頭を下げ直す（これを交互に，だんだん速くして繰り返す）			

どもたちは次の展開を予測する。その予測は当たっても外れても面白いものだ」と語っている[19]。これについて「愉快な心理的転位」という理論はどのように有効だろうか。注意が必要なのは，ただ「予測した通りになった」というだけでは，笑いは生じないという点である。予測が外れることによる笑いは，「当然このようになるはずだ」という予測と，現実とのズレによって生じる。これに対し，予期した通りになることによる笑いの場合は，「十中八九このようになるだろうが，もしかしたらそうはならないかもしれない」という不安定な予期が持たれていると考えられる。そうであるならば，不安定な予期が「やっぱりその通りになった」という確実な現実に変わることは，心理的転位であるといえる。予期の不安定さと現実の確実性の間のズレが笑いを生じさせるのである。よって，実際には予期が当たるか外れるかは，大して重要ではない。「９割方Ａだろうが，Ｂかもしれない」という不安定な予期があり，実際にはＢであった場合，残りの１割の予期が当たったことになり，「やっぱりＢだったか」とも感じられるだろう。いずれにしても，不安定な予期が確実な現実になることで心理的転位が成立している。

表３の【かくれんぼ】は，タマちゃんがオニになってかくれんぼで遊ぼうとしているのに，隠れようとするミーちゃんの後をついていってしまうというシーンである。

観客は前の２人の会話から，その場の状況やその後の展開として相応しい行為を予測している。ここで「通常の状態」として予測されるのは，タマちゃんは目を伏せたまま，動かずにミーちゃんが隠れるのを待つという状況である。しかしタマちゃんはミーちゃんの後を追いかけていく。これは観客の予測から外れた行為である。そして後ろをついて来るタマちゃんに気付かず，遊びが成立していると思い込んでいるミーちゃんの存在が，２人の状況に決定的なズレを作り出しているのである。

観客は２人の人間関係や，会話から読み取れるその場の状況，それぞれの気持ちを総合的に組み立てた「通常の状態」を予測している。挨拶のシーンと同じく，１人の行動が予測から外れたことに対してではなく，それが劇中の２人の関係や状況にそぐわないことへの認識がユーモアとなっているのである。いくつか条件がある中でも，最も単純で明確なズレは，ミーちゃんとタマちゃんの気持ちのズレであると考えられる。

しばしば大人の笑いと子どもの笑いが一致しないのは，ズレの認識の基準となる「通常の状態」の意識が異なるためと考えられる。また，ズレの認識に対して生じる感情が異なることも原因にあるだろう。例えばルールを破ることについて，愉快さよりも道徳的反感を覚える大人には笑いが生じないのに対し，ルールを守ると

表３　かくれんぼの１シーン「なかよし」

人　物	欲求　～したい	信念　～と思っている	行　為
じゃんけんでタマちゃんがオニになることが決まり，かくれんぼが始まる タマちゃん目を伏せて「もういいかい」と言う			
ミーちゃん	隠れに行きたい	タマちゃんは見ていない	「まーだだよ」と言いながら移動する
タマちゃん	ミーちゃんが隠れる場所を知りたい	ミーちゃんが隠れる場所を知っておく方が楽しい	隠れに行くミーちゃんの後についていく
後ろからついて来るタマちゃんに気付いたミーちゃん「ついて来ちゃだめ」 タマちゃん「だってね，ミーちゃんがどこに隠れるか見たかったんだもん」 ミーちゃん「そんなのだめ。さあ 向こう向いて。目をつむって」（タマちゃん伏せる） タマちゃん「もういいかい」			
ミーちゃん	隠れに行きたい	さっき注意したから，タマちゃんは見ていない	「まーだだよ」と言いながら隠れ場所を探す
タマちゃん	やっぱりミーちゃんが隠れる場所を知りたい	ミーちゃんが隠れる場所を知っておく方が楽しい	堂々とミーちゃんの後をついていく

いう通常の状態からの単純なズレを楽しいと感じる子どもには笑いが生じるということが考えられる。

おわりに

観客は①登場人物の言動から２人の気持ちを察し，②自分の持つ概念を基に次の展開を予期しているが，③実際の展開は観客の予期からは逸脱したものであり，そのズレを認識することでユーモアが生じている。

①の言動から登場人物の気持ちを察するには心の理論の獲得が必要であり，前述の通り，最も素朴な理解は３歳頃から，信念のかかわるやや複雑な理解は５歳頃に可能となる。

②の展開予期は，心の理論による登場人物の言動の予測と，事物の概念（通常の状態，社会や文化の常識の理解）からの予測の両方が含まれる。そして，③のユーモアの理解には，概念を習得しており，実際の状況とのズレが認識でき，楽しいと感じられることが条件となる。概念の習得には言葉が不可欠であり，これは３，４歳頃に獲得される。

この２点から，３歳という年齢は人形劇鑑賞において登場人物の気持ちを察し，ユーモアを理解し始める節目であると考えられる。３歳から笑いの反応が急激に増えると報告した松崎の調査は，保育所の３歳児クラスの園児を「３歳」としており，調査は10月に行われているため，半数近い園児が４歳になっていたと予想される。以上を発達の観点から鑑みると，調査における３歳以上の笑い反応は，登場人物の気持ちやユーモアを理解したものであったと考えられる。

注

1）【丹下進インタビュー】
「たとえば，『おいこらー』（優しい感じで）っていうと，優しそうな顔を一応形として思い浮かべる。「おい！　こら」（強い調子で）というと，今から怒りかけるかなっていう顔。「おい!!　こら～！」（もっと強い調子で）っていうと，もう怒っちゃった顔。３歳児くらいになると３つの違う顔が頭の中に絵として思い浮かべられる。そこで，３歳児くらいから入場料を頂くというのが世界共通になっている。」
引用：米谷淳，棚橋美代子，向平知絵「保育者養成における人形劇の活用―丹下進の人形劇指導―」（2008，京都女子大学発達教育学部紀要４号）

2）「３歳未満を鑑賞対象とした人形劇の現状と特徴」松崎行代（2009，飯田女子短期大学紀要　第26集）

3）松崎行代（2012，児童文学学会関西例会）

4）米谷淳「子どもの発達と人形―子どもはなぜ人形劇が好きか」（2012，子どもの文化 2012.７＋８　特集人形劇全科―人形劇のひろがりを願って）p. 26

5）潟見英明「『仲よし』日本の人形劇の代表的なレパートリー」（2012，子どもの文化 2012.７＋８　特集人形劇全科―人形劇のひろがりを願って）p. 172－174

6）同上 p. 173

7）たとえば，向平知絵，棚橋美代子，米谷淳「人形劇『なかよし』の作品分析―観客の行動観察からの試み―」（2009，京都女子大学発達教育学部紀要）や，同(9)など

8）松崎行代「１歳から５歳の観客を対象とした人形劇論―「なかよし」・「なにができるかな」・「ミーくんとまほうのたね」を中心に―」（2009，京都女子大学大学院発達教育学研究科児童学専攻修士論文）p. 74

9）向平知絵，棚橋美代子，米谷淳「保育学生に対する人形劇の実習指導に関する一考察」（2007，大学教育研究第16号，神戸大学大学教育推進機構）

10）同(8)

11）J・モリオール『ユーモア社会を求めて　笑いの人間学』（1995，新曜社，森下伸矢訳）第Ⅰ部（John Morreall “TAKING LAUGHTER SERIOUSLY” 1983）

12）例えば非ユーモアの笑いには，くすぐりや，くじに当たったことを知る場合などが含まれる。
同(11) p. 4

13）同(11) p. 75－81

14）大島希巳江『日本の笑いと世界のユーモア―異文化コミュニケーションの観点から』（2006，世界思想社）３章，６章

15）小嶋秀夫，森下正康『児童心理学への招待［改訂版］―児童期の発達と生活―』（2004，サイエンス社）p. 91
16）同上 p. 91
17）【誤った信念課題】
たとえば，主人公は，少し前に実際に見たので「子犬は庭にいる」と信じているが，被験児は子犬がその後で車庫へ行ったのを見ていたとする。そのような状況でも，「子犬を散歩に連れて行こうとした主人公は，庭へ行く」と予測できると，正答となる。
同上 p. 92
18）浦野武治，藤井弓子，人形劇団もぐら「人形のつくり方と脚本―「なかよし」「大きなかぶ」「3匹のこぶた」―」（2012，研究「子どもと文化」第13号，子どもと文化研究会）p. 20－30
19）同⑼ p. 39，丹下進インタビュー（2006. 12）